

〈招待作品〉

『天皇と呼ばれた男』

中川和郎

日本映画の歴史の中で、「天皇」と崇められ、尊敬され、反面ひそかに敬遠されもした監督が二人いる。

一人はご存知世界のクロサワ、黒沢明。もう一人は、黒沢明より前、すでにその尊稱を奉られている。

界

戦前戦後を通じ映画界を縦横に駆けめぐり、ある時期各社でひっぱりだこ。その要請に応え、期待を裏切らずその台所をうるおし、驚くなかれ二五本の映画と、二〇九本のテレビ作品を演出し、原作、シナリオ百本余をその生涯に手がけた監督、「早撮りの鬼才、名人」と謳われた渡辺邦男その人である。

森繁久弥が語り、久世光彦が綴った「大遺言書」に、森繁邸の石燈籠の話がある。大略を記そう。

「ちゃんと筋の通った春日燈籠です。あの燈籠は出演料の代りにもらったもの。早撮りで有名な渡辺邦男という監督が新東宝にいました。由緒正しい出なのにごう間違ったかカツドウ屋になった。早稲田の先輩で、

『安く、早く、儲かる映画』がモットーで、『明治天皇と日露大戦争』というモットー通りの映画を撮りました。昭和二十年代の終わりがから三十年代にかけて、この人の映画にはずいぶん出ました。

気がいい人で、話が早いので好きでした。しかし、たった一つ悪い癖がある。経営者兼監督なのに私にギヤラを払わない。七、八本分滞ったので我慢が切れて、もうアンタの映画には出ないと言ったら、それなら家に取りにこいということになった。大層なお屋敷でした。『あの石燈籠を持っていけ、但し一基だけだ。お前のごとき役者のギヤラは、それでも十分お釣りがくる』後、文化勲章に輝く森繁久弥に、渡辺天皇はそう宣い森繁は半日がかりで運んで来たという。

渡辺邦男は、明治三二年（一八九九）、田方郡三島町の大中島郵便局長の子息として出生。多くの兄弟姉妹がいた。三島尋常高等小学校から、明治四五年（一九一二）隣り町の県立沼津中学校に進学する。志願者一五〇名の

内合格者は九一名であった。

沼中の校門に通ずる道の両側の桜並木が満開だった。あこがれの制服は五月末の夏服から。三島から一里半（約六キロ）、七時五十分の朝礼に間に合うように、毎日テクッて通学した。

通学生の監督上、地区別に全体を十五区に分け、夫々に名稱がつけられていた。黄瀬川以東から通う三島・清水村などの生徒は、「黄東区」と呼ばれ、その区長は五年生がつとめた。

小柄だが負けん気の強い快活で利発な少年は、スポーツ好きでやんちゃな面も多かった。沼中入学後、野球部に籍をおく。全国的に「野球害毒論」や「野球亡国論」が、新聞などでかまびすしく、不良少年がやるものだと親も反対するような時代だが、彼にかぎらず人気のあった野球に、当時の少年たちは否応なくひかれていった。

また当時は稚児さん風習が色こく残っていた。五年生のヒーロー的人物が、幾人かの稚児さんを連れ校庭を闊歩していた。その仲間に入れてもらいたく見やっていた時、ある日、その上級生に突きとばされ泣かされたこともあった。

明治四五年七月末、明治天皇崩御。大正に代り、翌年三月三日、沼津の大火で川向うの町中は焼野原と化した。とにかく学校生活は、朝礼から授業の開始、終了と全

てラッパの合図。また皇族方のご送迎もかなり続いた。

そんな沼中一年生はアツという間に過ぎた。

大正二年、二年生の七月、欧洲第一次世界大戦が勃発する。

大正三年（一九一四）夏、静浦の寮に来ていた学習院野球部から試合を申し込まれる。東京のお坊ちゃん学校だ、たいしたことはあるまいと受けて立った。

当日、学習院は賀陽、山階、久近三宮殿下をはじめ、白の制服制帽の数十人の生徒が、選手を囲み入場し、沼中生は門の内外に整列して奉迎した。そして結果は14-2、散々な目にあった。その時、文芸部々長として観戦記を書いた橋爪健は、「13-2のスコアゲームにて、今日のマツチは無事終りを告げ」と記し、渡辺の回想では、13-0とある。

何れにせよ学習院の強さに部員一同大変なショックを受け、直後、名門横浜商業にコーチを依頼し、練習に励む。当時の野球部顧問は幾何の教師。バットを水平に振るより斜めに振れば、球をとらえる面積が広く当る確率が高いといふ、部員に大根切りフォームを練習させていたのは有名な話。

渡辺は自ら捕手を買って出て、胸当て、すね当てもなく、チップやワンバンドの球を、小柄な身体で精一杯受

けとめた。無茶と無謀、ただガムシヤラにつとめた。

水泳が正課の頃でそれが終つてからの野球部の練習はさすがにきつかった。渡辺の多感で激情的な面は、ここにも現われ、練習試合中にも興奮してくると涙があふれ、前が見えなくなるし、セカンドに球は届かず、時折りポジションを交替した。

全校生徒が参加する遠足の日、仲間三人で遠足をタコリ、こつそり香貫山に登った。当然ながらすぐバテて担任からきついお説教をされた。その時の教師の言葉は生涯忘れえぬものとなった。

「お前と同じような過失を犯した先輩にロクな者はいない。一人は相場師になり、もう一人は役者になって、沼中の名誉を傷つけた。いゝか、お前もこのまゝで行くと、相場師か役者のタグイになるぞ」

後年、映画界に身を投じ役者と同類になった彼は、複雑な思いでしばしばこの説教を反芻した。

大正四年二月、東京大阪間無着陸飛行が挙行される。

全校生徒がその壮挙を見送ることとなり、香貫山に見張りの生徒を立たせ発見次第ラッパを鳴らし、生徒は校庭に出る。意外にノロノロ飛ぶ二機を首が痛くなるほど見上げていた。そんなことをはつきり覚えてい

る。四月、四年生となる。

幹旋する。

やがて五年生。野球部のキャプテン。静中、浜中には遠く及ばず、葦中、掛中などといふ勝負。ナインもスパイクは半分ほど、ワラジばきもいた。捕手はあきらめ外野手になっていた。

大正五年（一九一六）九月、寄宿舎が火事となり、折角集めた野球用具もすっかり焼失、練習にも力が入らなかった。

運動会のラストに行う長距離競走では、十周するところをサポーターの楨が数え間違え、渡辺は一周余計に廻りながら八番に入った。三島沼津を往復する日頃の鍛錬がものをいゝ、小柄ながら運動では鳴らしたものだ。

羨ましかった稚児さんの夢は、上級生になってもうまくいらず、ふられっぱなし。沼津高女や三島高女の、エビ茶の袴姿に出会ふと、眼のやり場に困った。

映画など沼中五年間に、明治天皇御大葬の映画を学校で連れられて見たことしか覚えていない。当時の沼中は、言わば硬い教育一点ばり通っていた。

世評もまた、中学卒業後の進学は、官立校（一高、八高）か海兵、陸士が注目され、私立大学などものの教ではなかった。

大正六年（一九一七）三月、沼中13回卒業生として、入学時九一名は六三名卒業する。

全校で実施する学芸大会で、歴史講話「スパルタの鍛練主義」を発表、後、「スパルタ」とアダナされる猛者となっていた。

当時の流行歌は、「真白き富士の嶺」、「商船学校の歌」、「マックロケノケ」、「カチューシャの歌」。

ある日、仲間がこつそり買つて来た駄菓子子を、校庭の隅の竹やぶの中でつまみながら、ふと青空を見上げ、「カチューシャ可愛いや——」と気持よく歌っていたのを教師に見つかり、ポカリとやられたこともあった。

ある時はまた、理科の時間で教わった卯木の葉が黄疸にきく薬だと知り、校庭で見つけいきなり口にし、体調を崩し数日間欠席した。

同級の秀才、後藤憲一（二高東大）、楨正男（一高東大）、清水馨（陸士陸大）らとも仲はよく、野球部で苦労したり、後藤には英語の試験でヤマを教わり、出題されてい

ないところまで書きこみ、教師にからかわれたりした。運動部員に対する成績の評価は特に厳しく、すぐに退部、落第につながった。

縁者に当る渡辺孝が、葦山中学から転校して来たのは何時なのか判然としない。彼は丈六の出身で、中学生にしては珍しいカメラにこつた新しもの好きだった。すぐに野球部に入り、シュートを守った。後、明治大学から日活のカメラマンとして活躍し、渡辺邦男の日活入社を

世は大正デモクラシー、リベラリズムを謳歌。

入学後浅沼稻次郎（後代議士、社会党委員長。その在任中、右翼少年に暗殺される）らと知り合い、建設者同盟なるものを結成、マルクスボーイとして時流のおもむくまゝ左翼運動に奔走する。アルバイトをしながら卒業。一度、朝日新聞社に入社するも、上司の言葉に反発、憤然として退社。旅廻りの劇団に身を寄せる。しかし劇団そのものが敢えなくボシヤリ失業する。

就職運動に駆けずり廻り、前記したように、すでに明治大学を出て、日活大將軍撮影所でカメラマンをしていた渡辺孝を訪ねる。そして彼の紹介で撮影所々長池永浩之に会う。

縁続きとはいいながら、沼津中学の野球部で共に白球を追ひ、汗水たらした少年時代を共有する二人が、その後、日本映画界で監督、撮影のコンビを組み、数多くの話題作を産んで行ったことを思うと、二人を結ぶ絆の不思議な強靱さは運命的だといふ言いがたない。

彼は池永所長に監督志望を懇願するが、三年間は役者

をやれと言われ、月給三十円で大部屋に入る。大正十三年（一九二四）のことである。言われるまゝに何でもやった。当時の大スター目玉の松ちゃんこと尾上松五郎のスタントマンなど、苦しく切ない日々の連続だった。

昭和二年（一九二七）、初めて助監督として時代劇の池田富保、現代劇では阿部豊両監督のもとにつく。その際、池田監督の下で、早撮りのテクニクを学びいち早く身につけたと言われている。

昭和三年（一九二八）、日活京都は大森撮影所に移転する。彼は師匠池田監督が、別名で書いた脚本「剣乱の森」で監督として晴れてデビュー。渡辺邦男監督の誕生である。

この時のことを、大正十二年（一九二三）九月、関東大震災の日、渡辺より一足早く女優として日活に入社していた、下田生れで沼津育ちの浦辺糸子が次のように回想している。

「渡辺邦男さんという監督は、早撮りで有名な人でした。入ったのが、あたしと同じ日活で、監督になったばかりの頃『自分も芸術映画を撮りたい』って言ったら、池永所長に怒られたんだそうです。『芸術映画は村田実や伊藤大輔に任せておけ、お前は夜の店のステッキみたいな、安くてよう人が買ってくれる映画をつくれ。

が予定されていた。しかし例の長谷川の刃傷事件で製作は中止。予想もしない事件とはいえ、無念の想いは残ったろう。

しかし昭和十四年（一九三九）、長谷川一夫、李香蘭（山口淑子）で、満州ロケを敢行した「白蘭の歌」前後編は空前のヒット作品となる。続いて昭和十五年、「新妻鏡」、「熱砂の誓ひ」などの作品も益々好調で、戦時下の大衆を楽しませ、喜ばす娯楽作品監督として一時代を築いていく。

要するに映画は、客が入ってくれなければ撮る方としては張合いがない。一部の批評家や新聞雑誌でたえられようと、多くの人が観て喜び楽しんでくれなければ意味がない——彼はとにかくそれに徹したのだ。

戦争の暗雲が次第に重くただよい行くにつれ、映画製作も減少して、さすがの渡辺邦男も昭和十六年から、二十年の敗戦までの五年間、九本の時局的作品を手がけているだけだ。

昭和二十年（一九四五）八月十五日、永い戦争はとにかく終わった。世はあけて自由と平和と民主主義。

その年十二月、東宝撮影所従業員組合が結成され、翌二十一年春、賃上げ闘争、生産管理問題などもめつた。

昭和二十三年（一九四八）四月、東宝は共産党員及び

何でも安く、早くじゃ、いやならやめろ』って」

池永所長のこの言葉に、彼はとにかく深く期するものがあつたにちがいない。

その後、年間七、八本の作品を手がけ、昭和九年（一九三四）、各社で競作になった「さくら音頭」を、わずかに九日間で仕上げ、他社を出し抜き公開、早いもの勝ちの大成功をおさめ、「早く、安く」の早撮り監督としての名を一層高めた。

やがて太秦から日活多摩川に移り、東京、京都と東奔西走。「早く、安く、儲かる映画」をモットーに、メガホンにぎり続けた。

昭和十年（一九三五）、東京日々新聞社（現毎日新聞社）の第一回映画コンクールに、軽快なミュージカル風「うら街の交響楽」を出品。一等入選を果たし、大いに面目をほこす。

昭和十二年七月、日中戦争勃発。その後召集を受け戦地に行くも、間もなく帰還。日活を退社。

東京宝塚、P・C・L、J・Oが合併して東宝映画が誕生の際、P・C・Lを経て東宝に移籍する。

東宝での初演出は、林長二郎と名乗っていた長谷川一夫が、松竹から東宝に転じた入社記念作品「源九郎義経」

その同調者など約二百人余の解雇を発表。それに反対する二人余りが撮影所に立てこもり、あの「空には飛行機、陸には戦車、来なかったのは軍艦だけ」という東宝大争議に発展する。

その間、昭和二十二年二月、五月と渡辺邦男は原節子主演の「緑の故郷」、「麗人」の二本を、とにかく一気に撮りあげている。

この争議の最中、大河内伝次郎、長谷川一夫、藤田進、黒川弥太郎、山田五十鈴、原節子、高峰秀子、入江たか子、花井蘭子、山根寿子ら主演スターが「十人の旗の会」を結成、組合を脱退する。一方、渡辺邦男を押し立てた製作スタッフの大半がこれに共鳴、第三組合の希望を入れ、東宝傘下のユニットプロダクションとして、新東宝映画製作所が誕生する。

往年のマルクスボーイも、反組合のリーダーに変わっていったのだ。

しかしこの新東宝は東宝との連係が次第にギクシャクし、首脳陣も二転三転し、渡辺邦男は製作面での監督だけでなく経営陣に名を連ね、大車輪の活動を余儀なくされる。昭和二十五年（一九五〇）から、昭和三十三年頃までの日本映画の全盛期には、年間十本から十三本、連続して作品を手がけている。

そしていつしか、彼の頭上に様々な想いをこめた「天皇」という尊稱が刻まれていく。

映画作品一本は、通常撮影日数四、五十日と言われている。早撮りの渡辺監督は、それを十日そこで仕上げてしまう。早く、安く、出来あがる。だから会社は太助かり。そこには彼の並々ならぬ身についた創意工夫があり、段取りの手際よさがあったにちがいない。

シナリオに基づくコンテが、キチツと頭に入っていて無駄のない出演者の出番、演技を素早くカメラに収めていく。だから彼の作品の出演者は、いつ自分の出番がくるか分からないので、じっと待機していなければならなかった。

「エノケンプロダクション」と新東宝が提携していた頃、監督はもちろん渡辺邦男。主演のエノケンが、ちょっとした合間に近くのトイレに行った。監督が「ハイッ、榎本くん」、傍らの助監督が「今、トイレに行ってます」「じゃあ、知らない、次、いこう」と、カットした。

戦前からの気心の知れた友人であった二人の間でも、数分間が待ってられない渡辺の、気の短さと言うかせっかちと言うか、その演出ぶりは油断もスキもありはしなかった。

「早く、安く、儲かる映画」をモットーに、当時、新作二本立てでしのぎを削る競映を続けていた各社にとつて、決して芸術的香り高い作品とは言えないが、速製品にありがちな粗末なものではなく、大衆的で軽快で誰にも判る一定の水準を保つ娯楽作品を仕上げ、しかも儲けさせてくれる渡辺邦男は、喉から手が出るほど欲しい監督であった。

多くのインテリ層から無視されようが、小屋一杯に客を呼び、観客を楽しませ会社を儲けさせてくれる巨匠だったのだ。

その頂点が昭和三十二年（一九五七）の「明治天皇と日露大戦争」である。

竹中労の「聞書アラカン一代、鞍馬天狗のおじさんは」（「あらかん天皇紀」）から任意抽出してみよう。

「昭和三十一年後半、ワテは新東宝専属になりました。この会社は当時オチメヤ、経営陣が交替して大蔵貢はんが乗りこんできたばかりです。製作本部長格で、渡辺邦男監督がいてはりました。そもそも新東宝ゆう会社

の生みの親は、この渡辺監督ですね。娯楽映画の巨匠や、その手腕で会社の建直しをはかった。クニさんと組んで『怨霊佐倉大騒動』、『女人曼

エノケン没後、渡辺自身が語っている如月寛太のエピソードも記しておこう。

如月の出番をどうしてか渡辺が忘れカットしてしまった。しばらくして「私の出る所はどこでしょう」と、渡辺の後で遠慮深く立っていた如月が言った。「あつ、すいません、とんだことをしてしまつた」とわびる渡辺をエノケンはじつとにらみながら、如月の肩を叩き、半ば叱るように「君の演技が監督の目にとまらなかったからこういうことになったんだ。これから目にとまる演技をして頑張るんだな」。その即妙の一言でその場の緊張がとけ、渡辺はその過失を救われたのだが、エノケンの言葉は、そっくりそのまま渡辺への言葉だったし、その時のエノケンの何とも言えぬ怒りの目を、渡辺は忘れられなかったという。そんな一面もあったのだ。

昭和二十八年（一九五三）正月、「午前零時」という東宝での作品がある。争議の後、東宝再建のため尽力してくれた渡辺に、ポーナスの意味で、「代表作のつもりで、ゆつくり一ヶ月以上かけて、好きなものを作って下さい」と、会社が声をかけ出来上った作品だ。しかし、「一ヶ月以上なんて長すぎる。どだいワシのテンポに合わん。ダレちゃって」と渡辺。この作品は確かに余り評判にもならなかった。

陀羅』、これは客がきました。そやけど他の作品パツとしまへんのや。

大蔵貢はん、ここの大勝負、天皇はんをネタにすることを思いついた。昭和三十三年の正月、ワテのところへ使いがきました。五月ゴールデン・ウィークに超大作を出す、その主役をやってほしい。どんなシヤシンです？ 日露戦争の話としか聞いておりません、詳細は社長と渡辺監督から申し上げます。

『寛寿郎クン、明治天皇をやってほしい』。『えッ乃木さんやおまへんのか！ そらあきまへんな、不敬罪。ですわ、右翼が殺しにきります。ワテはご免をこうむりたい』。

『大丈夫や、ボクかて右翼やないか』、監督すずしい顔をしとる。体はこまいが肝ッ玉は太い』

大蔵貢はこの作品に社運を賭け、総天然色大シネスコ、制作費二億円を投入すると吹いた。活弁あがりの大蔵に説得され、アラカン、本邦最初の天皇役者となる。セツト撮影は、ライトの光量が並みの四倍。直立不動での演技、アセモだらけになったという。

完成試写会には皇太子（現天皇）もお見えになり、空前の大ヒット。封切りで八億円を稼いだ。とにかく興業収入の日本記録を作った。アラカンは新橋の料亭に呼ば

れ、ボーナスとして社長から十万円をもらった。八億円稼いで十万円。アラカン曰く、「ゼニ残す人はちがいますな」

この時、渡辺監督は原案を練り、総監督として毛利正樹監督たちを使い、撮影は渡辺孝に一任した。そして、正しくモットー通りの「早く、安く、儲かる映画」の金字塔をうちたてたのだ。

余談ながら、大蔵貢は天皇をダシに、柳の下のだジョウを狙い、次々に「天皇・皇后と日清戦争」、「明治天皇と乃木大将」など、自ら演出に口を出して製作する。

さすがに渡辺監督はとくに見切りをつけ、美空ひばりで「雪之丞変化」を撮り、会社に儲けさせ新東宝を去っている。

大蔵貢が記者会見で、皇后役で登場させた高倉みゆきについて、「女優を妾にしたオボエはありません。妾を女優にしたのだ」と言い放ったあのゴシップは余りに有名である。そして新東宝はつぶれていく。

渡辺邦男と渡辺孝は、縁者に当る中で先ず沼中野球部のチームメートとして活躍し、長じて映画界で手をたづさえ、幾つかの話題作をさり気なく残していた。

昭和という永い時代の日本映画の歴史の中に、二人の功績ははつきりと刻まれている。

思えば三島は、妙に映画監督に縁がある。

江戸っ子ながら戦時中に伊豆へ来て、昭和二十八年、大仁から移住、昭和五十四年（一九七九）、三島人として世を去った五所平之助監督。氏は私たちにとても近い人であり、なじみ深い巨匠であった。

しかし同じ頃、カツドウ屋に身を投じ、その生涯を日本映画界に捧げ、キネマ旬報のベストテンには名を連ねなくとも、娯楽としての映画にポリシーを定め、鬼才、天皇と呼ばれた渡辺邦男監督こそ、生粋の三島っ子なのである。その「天皇」を郷土三島の誇るべき先人として、私たちは今こそ顧みる必要があるだろう。

加えて、自作の中に桜の花びらを挿入し、ファンタスティックなオペレッタ風喜劇「狸御殿」シリーズや、戦後、京マチ子主演の「痴人の愛」、「牝犬」、「馬喰一代」にメガホンをとった木村恵吾監督。氏も又、葦中から早稲田へ進み、脚本家として映画界に入り得難い監督として活躍した純粋な三島人である。

今は亡きこれらの方々を故郷三島の宝、誇として何とか報いることを、私たちは忘れてはならないだろう。

「フリー百科事典・ウィキペディア」

「日本映画テレビ監督全集」 ㈱キネマ旬報社

「昭和芸能秘録」 道江達夫 中公文庫

「聞書アラカン一代、鞍馬天狗のおじさんは

嵐寛寿郎十竹中芳

白川書院

「映画道中無我夢中」

浦辺象子 河出書房新社

「静岡野球人国記」

読売新聞社静岡支局

「沼中東校八十年史」

「沼津中学沼津東高百年史」

「エノケンと呼ばれた男」

井崎博之 講談社

「大遺言書」

森繁久弥語り久世光彦文

新潮文庫

参考文献

